

大学における男女共同参画推進の教育的意義

— 当事者意識の喚起による内発的学習 —

■ 廣瀬 淳一（高知大学安全・安心機構）

はじめに

価値観やライフスタイルの多様化が進み、学びたい時が学習適齢期という考え方も広がるなかで、様々な年齢の人々が大学のキャンパスで学ぶ時代を迎えている。また情報通信技術の進歩により、インターネットを活用した通信教育など、学習形態にも選択肢が増えている。しかし、いまだ大学のキャンパスではこれから社会人となる若者の比率が最も多く、大学は学問に打ち込む研究機関である同時に、優良な社会人の人材育成機関としての役割を期待されていることも事実である。学生のほとんどは、大学を卒業し、就職し、そして結婚、育児、介護などのライフ・イベント^(注1)に当事者として向き合う時に初めて、大学で学んだ知識や社会の仕組みに対してリアリティを感じるようになる。

ライフ・イベントと仕事の両立は、核家族や少子高齢の現代日本において喫緊の課題とされており、その解決の方策に強い関心が寄せられている。そして、そ

の課題解決に向けて男女共同参画の視点を取り入れたアプローチに期待が寄せられている。大学に対しても男女共同参画社会の実現に向けた社会的貢献の役割が強く期待されている。このような期待に対し、国立大学協会は「国立大学における男女共同参画推進について—アクション・プラン—」（国立大学協会 2011）で、大学の男女共同参画の推進を日本の科学・技術の発展と経済成長に大きく資するものと位置づけ、また独立行政法人科学技術振興機構（JST）は、2006年度より女性研究者支援事業等によって、大学における男女共同参画の推進に対して具体的な支援を行っている。例えば、国立大学法人高知大学（以後、高知大学）は、2012年2月に「高知大学における男女共同参画の基本理念・方針」を制定し、そのなかで、大学は「学知の拠点として、次世代育成の母体として、さらには地域社会の発展の基盤として、大学は男女共同参画社会を実現するための先進的なモデルを提示する立場」にある、と述べている。そして、高知大学は『「男女共同参画を大学で実践し、教育につなげ、そして社会に広げる」という基本的考えのもと、男女双方にとって、学びやすく働きやすい場、個性と能力をよりいっそう発揮できる場を形成することに努めます』と基本理念を掲げている。つまり、大学を構成するすべての男女がその能力を発揮できる職場環境・教育環境を築き、

^{注1} ライフ・イベントとは「人生の出来事、人生の道標、意味ある変化をもたらすもの（Homes and Masuda 1974）」、あるいは「日常生活のなかで誰もが多かれ少なかれ体験する状況（Dohrenwend 1974）」などとされており、その定義が該当する範囲は広い。ライフ・イベントは仕事との両立の文脈において、仕事、結婚、出産、育児、介護等を指す場面で使用されるが、心理学の領域ではもう少し広く、夫の転勤、夫婦別居生活、離婚、親族の死別、著しい成功等のストレスサーも対象に含めて使用されることがある。

男女共同参画の視点に立った教育を通じて、男女共同参画社会の形成に寄与する人材を育成し、そして大学での実践を社会に向けて発信することを、男女共同参画の基本方針としている。社会实践の手法については、すでに多くの社会科学の分野で考究されており、その手法開発自体がひとつの研究分野になっている（菅 2013）。男女共同参画の取組みも大学という空間におけるひとつの社会实践のツールとなる可能性を持っている。なぜなら、この社会实践は、学問の専門分野の異なる教員、大学の運営に係るすべての教職員、そして学生が男女共同参画に関する課題に、生活者としての当事者性から取組む「実践的教育」を意味していると考えられるからである。

本稿では、今日の社会における男女共同参画を取り巻く状況を踏まえて、大学において男女共同参画に取組み、教育に活かすことの意義について考察する。はじめに、場面によって多様な解釈がなされがちな「男女共同参画」の言葉が意味することを改めて確認する。次に、大学生の学習に対する当事者性について考える。テキストとして教えられる知識に対して、学生が当事者性を感じるために、男女共同参画の教育がどのような役割を果たすことができるかについて、高知大学が2012年度より実施している共通教育科目「男女共同参画社会を考える」を事例として取り上げて学生の反応を分析する。

本研究の特色は、大学における男女共同参画推進の取組みが、ともすれば外部資金による女性研究者支援の一環として行われているキャンペーン的な活動との印象があるなかで、実は大学の授業に日常的に男女共同参画の視点を取り入れることが教育的な効果を高めることを明らかにし、そして、男女共同参画の取組みを通じて持続可能な社会の発展に貢献できる人材の育成を担う大学として、そこで学ぶ学生はもとより、教職員にとっても自らが研究・教育の題材であり、当事者であることを確認することで、大学全体における男女共同参画の現状と課題を捉えなおす点にある。

1. 男女共同参画について

(1) 男女共同参画に対する多様な解釈

思想家の内田樹は、『女は何を欲望するか？』のあとがきで、男女共同参画社会の言葉が意味するものは、「男も女も社会的資源（権力、地位、名誉、財貨、文化資本……）を求める点においては変わらないので、この資源の競争的配分において性差別があってはならない」というものであり、男女共同参画社会論の前提にあるのは、男女は「同一のニッチに属し、資源に対して同一の欲望をもつ」とする考え方であるとして、この断定に留保をつける、と述べている。内田はその理由として、男女共同参画社会論はしばしば能力主義的な語法で語られるように、その実相は「能力のあるものが取れるだけのものを取り、能力のないものは自己責任によって飢える」ことも止むを得ないという、「究極の競争社会」であるとしている（内田 2008）。

しかし、今日の日本で男女共同参画社会が語られる時、その中心的な話題はニッチの奪い合いという議論よりも、むしろ、例えば、山田昌弘『希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』（山田 2007）、本田由紀『軋む社会 教育・仕事・若者の現在』（本田 2008）、阿部彩『子どもの貧困—日本の不公平を考える』（阿部 2008）といった著書に共通するように共生社会の有効性について見直そうとするテーマが多いのではないか。このようなテーマで論じられる問題の原因の一端は、例えば表 1. で見られるように日本の共働き家庭における夫の家事労働時間の平均が30分であることに象徴される「男働き」を基準とした労働環境を前提に置いた産業社会であり、人間生活に纏わる諸問題の解決を家庭に押し付けて処理させてきた生活様式である。つまり、グローバル化の波に乗ることが企業の生き残り戦略であると考えられる共同幻想と、これまで持続的な社会を形成してきた地縁・血縁社会や様々な共同体の仕組みを近代合理性の名の下に壊してきた結果、経済の成熟と経済成長の停滞が、企業の福利厚生や社会保障がかつての相互扶助に代替するほど十分に持続可能なセーフティネットではなかったこと、そして家族や親族が許容できる負担吸収力の

限界を超えてしまった事実を露わにしたということである。この「男働き」の様式が標準として日本の労働が構築されているなかで、大多数の女性が「男働き」を選択すれば、仮に経済的にゆとりある者が家事労働時間をアウトソーシング出来たとしても、これを持続可能な働き方と認めることは難しいだろう。家事労働時間30分の個人で成り立つ社会というのは、いったいどのような暮らしとなるか、考えてみる必要がある。このことは女性の社会参画を遮るという意味ではなく、「男働き」を標準とする労働観を見直すことで、むしろ、男女共にその能力を活用してイキイキと働くことができる労働環境をつくることの重要性に注目しようという考えである。

次世代を育てる欲求を指す言葉に、ジェネラティビティ (generativity) がある。これに関してアメリカの研究で明らかにされたことは、子育てに参加した父親は、自分の子どもだけでなく地域の子どもを育てるというジェネラティビティ観に芽生える、ということである (McKeering, H. & Pakenham, K. L. 2000)。周囲に子育てに十分関わる父親が一定数以上いることは、地域づくりはもとより、ビジネスにおいても社会に貢献できる方法を考えるようになるという点で有意義である。逆に、地域の子どもに関心を持たない男性が増えることは、「ジェネラティビティ・クライシス」(小此木他 2004) として警鐘をならされているように利己的な発想に起因する様々な社会問題を増加させるとして危惧されている。

先述した内田の指摘は、確かに理屈として理解できる部分はある。確かに今日の日本ではグローバル企業がもてはやされ、大学に対してもグローバル人材の育成を強く求める産業界からの要望も大きい中で、「能力のあるものが取れるだけのものを取り、能力のないものは自己責任によって飢える」という考え方があるのは事実である。学生のなかにも能力主義を無批判に受け入れ、例えば「働かざる者食うべからず」の言葉が働かない貴族や資本家に向けて発せられたもので、しかもその背景には「働きたいが働けない者は食べてよい」という条件があることを知らないで誤用してい

る者もいる。筆者が内田の言葉に対して違和感を覚えたこと背景には、今日の社会においては、男女共同参画を「究極の競争社会」を目指すツールとしてではなく、男女ともにマイノリティ (少数派) の立場に置かれた者であっても、その意志や能力が活かされるような共生社会を目指すツールとして期待を寄せている多くの人たちの存在がある。

(2) 日本社会と男女共同参画

男女共同参画をインターネット和英辞書で調べると“Gender-Equality”と表示された。同様に“Gender-Equality”を英文和訳すると「男女平等」と表示された。英語圏では「男女平等」としている言葉を、日本では「男女共同参画」と言いかえて表現する必要があるところに日本社会の特徴が読み取れる。筆者も「男女平等」と「男女共同参画」を同義語として使用することにある種の「ためらい」を感じる。この「ためらい」の理由のひとつは、社会の構成単位を「個人」と考える個人主義の社会と、非一人主義社会との間の価値観の違いにある。「個人」が単位として構成される社会にとって、ひとりひとりが共同で社会づくりに参画することは、理屈として自然な事である。もちろん個人主義を代表する西欧社会においても男女平等はその途上にある。しかし、西洋中世史を専門とした阿部謹也が指摘するように、西欧社会で「個人」が生まれたのは12世紀とされており、それ以来18世紀から19世紀頃まで長い時間をかけて成熟してきたと考えれば、西欧社会は個人主義という思想において他の社会より先行していると考えられることもできる。

非一人主義とされる日本社会にとって、男女共同参画は男女平等の取組みのみならず、共同体に受け継がれる慣習的な価値観も踏まえ、個人主義社会が生み出した諸概念との折り合いをつけながら、共同体の成員間の合意形成を通じて社会の仕組をつくって行くという民主主義のプロセスに関係している。日本で「個人」はインディビジュアルの訳語として、1884年(明治17年)に紹介されたと言われる。また「社会」はソサイエティの訳語として、1875年(明治8年)に

福地源一郎が『東京日日新聞』の社説で「社会」と訳したのが最初とされるが、例えば中村正直はこれを「仲間連中」、福沢諭吉は「人間交際」などと訳すなど、それまでの日本にソサイエティの概念が存在しなかったからこそその翻訳の苦労が見える。しかし、それから130年以上を経た現在の日本においても、「社会」がいわゆるソサイエティと一致しているかと問われれば、自信を持って肯定できるかどうかはわからない。日本の大学は近代合理性に基づいた教育を行っているが、例えば西欧の思想や生活様式に通じている大学教員が、職業生活では科学者として行動していたとしても、家庭生活では家父長的に振る舞い、居酒屋では日本のサラリーマン文化を体現するなどの「社会的合理性（村上 2010）」に基づく行動をしている風景は日常的に見られる。現代日本が先進工業国であることは間違いないが、その固有の自然環境と社会環境、そしてその歴史を振り返ると、やはり日本が西欧社会ではないということをもう一度確認することは必要である。

2. 大学における男女共同参画の教育

(1) 学生中心の教育による学習の動機づけ

大学を研究者養成の機関として考えれば、学問への知的好奇心がひとつの強烈な学習動機になる。しかし、大学には研究者養成機関としての役割に加えて、社会にとって有用な人材を育成する役割がある。それゆえに、大学で行われる授業には、この両方の役割を果たすことが期待される。

ある大学教員は、新入生の動機づけの段階で、キャリア教育をベースにした大学教育理念の必要性を感じ、就職委員を委嘱された時に、全学共通教育科目として「人生と進路選択」に関する授業の開設を提案した。しかし、会議において同僚からは「その科目を履修すると就職できるようになるのですか？」といった反対意見があり、結局その年度には科目を開設できなかった。その大学教員は「多くの教員は学生の就職ごとは「就職部」にお任せで、教員は学生の就職ごとに口を挟むことはしなかった。就職ごとは、教学事項で

はなく教育とは無縁なことであると考えていたからである」とその理由を振り返る。（宇佐見 2012）

この時に言われている「学生中心の教育」とは、例えば「経済学」であれば、学生にとって「経済学」がどのように役立つものなのか、「経済学」とその学生との関係性を明らかにする視点を取り入れた教育ということになる（宇佐見 2012）。宇佐見は学生中心の教育について、次のように述べる。「この授業は、勉強は勉強でも学問ではなく、自分の人生、考え方に直接影響を及ぼす授業だ」というとき、この学生は「大学における学問とは何か」を考えるスタートラインに立てたことになる、と（宇佐見 2012）。

男女共同参画の視点で考える授業というものは、まさにここで言うところの「自分の人生、考え方に直接影響を及ぼす授業」ということが出来る。

(2) 女性学・ジェンダー研究関連授業

「国立大学における男女共同参画推進の実施に関する第10回追跡調査報告書」によれば、平成24年度に国立大学で開講された「女性学・ジェンダー研究関連授業」は1,419科目で、年々増加傾向にある（国立大学協会 2013）。受講生全体について見ると、男性26,718人、女性28,895人と男女比はあまり変わらない。しかし、全学共通科目では、男性9,956人、女性7,989人と男性の受講者のほうが多い一方で、例えば専門的教育を行う博士課程では男性15人、女性166人と受講生の約9割が女性である。

2008年度に国立大学で実施された女性学・ジェンダー研究関連授業について調べてみると、例えば、次のような授業が開講されている（国立女性教育会館データベースより）。

現代ジェンダー論（北海道教育大学）、性差研究入門（北海道大学）、男女共同参画の実践を学ぶ（岩手大学）、ジェンダーと法演習（東北大学）、男女共生論（秋田大学）、男女共同参画社会と教育（山形大学）、家族とジェンダー（茨城大学）、ジェンダー社会論（筑波大学）、妊娠と出産、親になるということ（群馬大学）、男女共同参画社会論（埼玉大学）、ジェンダー少

年法論（千葉大学）、比較ジェンダー論、政治とジェンダー、女性政策論（お茶の水女子大学）、男女共同参画時代のキャリアデザイン、労働とジェンダー（一橋大学）、ジェンダー心理学（東京学芸大学）、ジェンダー研究の理論と方法、ワーク・ライフ・バランスと女性の活躍の場の拡大、国民道徳とジェンダー（東京大学）、女性労働論（新潟大学）、男女共同参画社会（静岡大学）、男女の共生（滋賀大学）、ジェンダーと科学（京都大学）、女性学（大阪大学）、女性と子どもの人権論（神戸大学）、ジェンダー生理学（奈良女子大学）、女と男の文化論（和歌山大学）、女性と現代（島根大学）、ジェンダーと生きること一働く未来に向けて（岡山大学）、女と男の諸相、女性研究者サポーター概論（広島大学）、親教育特論（徳島大学）、女性とキャリア（香川大学）、地域女性政策（愛媛大学）、男女共生社会論（高知大学）、女性学・男性学（九州大学）、女性福祉論（大分大学）。

男女共同参画の対象領域は広く政治学や経済学、社会学、文化人類学、看護学、社会福祉学等の分野と関係が深い。しかし、そこでは必ずしも男女共同参画を意識した授業が行われているわけではなく、実際は、男女共同参画をテーマとする授業は女性学やジェンダー研究関連の科目で行われていることが多い。

これらの様な科目に加えて、広い領域の科目において日頃から男女共同参画の視点が扱われることで学生の当事者意識が高まり、より効果の高い学習が可能になると考えられる。

(3) オムニバス授業・シンポジウム授業

ここでは、「勉強は勉強でも学問ではなく、自分の人生、考え方に直接影響を及ぼす授業」について、オムニバス授業、シンポジウム授業の例を取り上げて考えてみたい。

高知大学は、共通教育科目として「男女共同参画社会を考える」をオムニバス方式で実施している。男女共同参画の授業は、男女共同参画に関する課題について多角的な視点から考えるという趣旨で行われている。多角的な視点を担保にするために、男女共同参画の授業では人文・社会、自然科学、技術系などの異なる

分野の教員が協同で実施している。男女共同参画の授業は学問的な専門性を異にする教員、そして学生が、人間の生活という部分で課題を共有できる貴重な機会でもある。これは仮説であるが、学生は普通の講義で見る機会が少ない生身の教員の声に親近感を覚え、学習内容に対してもリアリティを感じることができるのではないだろうか。

先述した「人生と進路選択」も「人生と職業のかかわりを総合的に理解することによって一人ひとりの学生が自分の将来設計を描くための基本的モチベーションと将来への目的意識を育成・強化し大学で学ぶことの意味と意義を再認識してアイデンティティーの確立（個性の発見と研磨）をサポートする」という目的で、学内の教員と外部講師、職員、在学生が協力するオムニバス形式行われてきた（宇佐見 2012）。そして、「大教室での大人数授業であるこの授業は、ともすれば講師からの一方的な講義に偏ることが懸念されたために、新しい授業形態として[シンポジウム授業]を導入している」（宇佐見 2012）。「シンポジウム授業とは、教壇に数人のパネラーが上がり、基調スピーチをしたあとで、科目担当者が司会者となってフロアの受講者からの発言を引き出しながら、シンポジウムのテーマについて討論するというものである」（宇佐見 2012）。高知大学の共通教育「男女共同参画社会を考える」も、4日間のオムニバス講義の初日に2コマ分をシンポジウム方式として開講している。ここでは、学問的な専門性を異にする研究者や実務家が身近な出来事や経験を盛り込みながら自由な雰囲気の中で語り合うということを大切にしている。大教室で行われる授業は教員と学生との双方向の対話が難しい。高知大学の場合は、シンポジウムのアンケートを出席表とするほか、各授業で感想を提出させている。授業の感想や質問を記入する形式の出席票を使うことは、学生とのコミュニケーションにとって有意義であり、その課題のテーマは「自分の問題として考える」という要素を盛り込んだものである必要がある。「学生中心の教育」における授業では、「学生本人にとっての自己省察」（宇佐見 2012）を導く工夫が最

も大切である。高知大学の場合は、各授業で出席票の自由記述欄に意見や疑問を書いて提出してもらっている。出席票の使い方は担当する教員によっても様々で、筆者は講義のはじめに課題に関する統計データを提供し、学生に自ら考えた仮説を記入させている。そして、授業を聞いてうえで仮説の修正を加えたものを提出してもらっている。これは、学生が自分なりの関心を持って授業を聞く姿勢に寄与していると考えている。

(4) 教員の当事者性

科学技術社会論者の平川秀幸は、社会づくりに関して「(ガバメントによる) 統治」と「ガバナンス」を分ける一番のポイントとして「誰が社会の舵を取るのか」という論点を提示している(平川 2010)。従来の「統治」の考え方では、政府が舵取りの主体であり、社会の公共的問題を解決する主体であるとしていた。社会の公共的問題を解決するための意思決定や利害調整を行うのは公共部門を代表する政府であり、その他のアクター(国民、企業などの民間団体・組織)は、その政府が決めたことに従うことが求められてきた。そこには、統治される者、統治する者という「上下関係」、つまり縦の関係が見受けられる。ガバナンスとは「複雑で重層化した社会の諸問題を考えるにあたって、それに対応し社会を管理する主体の多様性、多元性を認め、その個々の能力や、それぞれの連携を重視し、制度設計などを行う統治のあり方」を意味する(菅豊 2013)。そして、今日の社会実践の手法は「市民」を巻き込む方向に転換している。

教員と学生の水平な関係の重要性について述べたものに、次のようなものがある。1968年から1969年、全国的に多くの大学で学園闘争が起こり、学生の不満に呼応して正規の授業ではない教育の場を構築しようとする新しい動きがあった。その先駆けは当時、東京大学工学部助手であった宇井純の始めた「東大自主講座・公害原論」である(木野 2012)。宇井は、自主講座開講の言葉を次のように述べている。「立身出世のためには役立たない学問、そして生きるために必要な学問の一つとして、公害原論が存在する」、そして

「この講座は、教師と学生の間には本質的な区別はない。修了による特権もない。あるものは、自由な相互批判と、学問の原型への模索のみである、と述べた(宇井 1991)。宇井は、学生も教師も共に、一番大切な問題は何かを考え、そのためにはどうすればよいかを学ぶことが必要であると考えて自主講座を始めた。学生と教員の間では学問の習熟度において垂直的な関係はある。しかし、生活者であるひとりの人間としては水平な関係は残る。時に、教員から『相談を持ちかけられている』という状況は、相手に信頼されている証拠であり、加えて教員に「頼られる」「助けを求められる」経験は殆どの学生にとって皆無であって、教員と学生の立場の逆転は学生の自信と肯定感を高める』のだという(長谷川 2012)。

男女共同参画の課題も、まさに「誰が社会の舵を取るのか」という課題を共有しており、ひとりひとりが参画の主体として、その多様性、多元性を担保することを前提として考える点においてガバナンスの問題と言える。「多様なアクターの複数の声は、ときに上下関係や対抗関係の構図をとることもあろうが、また一方で、そのような関係性を超えて異なる意見を持った者たちが、数多くの対話を重ねる「多声性(polyphony)」の構図をとることもある(菅 2013)。教員、職員、学生の違い、そして専門領域の違いを超えて、生身の人間の生活という点で共有すべき問題に向き合い、その解決に向けた意見を出し合うところで、男女共同参画は深い関係性を持っている。

3. 大学における教員の男女共同参画

ここでは「平成25年度 高知大学における男女共同参画に関する意識調査報告書」を参照しながら、男女共同参画における教員の当事者性について考えてい。この調査報告書は平成25年2月12日から28日に実施されたアンケート調査の結果をまとめたもので、大学における男女共同参画意識の現状と働き方の改善、ワーク・ライフ・バランスの実現、仕事と家庭の両立、女性研究者支援等の現状と課題を把握して、学内の男女共同参画の取組みに反映していくことを目

的としている。調査対象は教職員、大学院生を合わせた3,348人で、回答率は36.6%であった。同報告書は公開されており、大学図書館や男女共同参画センター等にも配付されている。

報告書によれば、高知大学の女性教員の既婚率は42.6%、男性は84.5%で、女性教員の未婚率が非常に高い。特に40代では男性が約85%であるのに対して、女性の既婚率は25%である。

次に、配偶者がフルタイムで就労している割合では、30代・40代の既婚女性教員の場合、配偶者の100%がフルタイムで就労していた。他方で、30代・40代の既婚男性の配偶者がフルタイムで就労している割合はわずか25%で、専業主婦の占める割合は50%であった。このことから、高知大学で働く既婚の教員のうち、男性の場合はその配偶者が専業主婦である比率が非常に高い。次に既婚者の別居率では、女性教員は約20%、男性教員は約13%、女性事務職員の別居率が約8%であることと比較しても女性教員の別居率が高い水準にあることがわかる。

家事時間を見ると、就業日の家事時間について、女性教員は1日平均89分であるのに対して、男性教員は半分以下の35分である。また事務職員を見ても女性の1日平均の家事時間が127分に対して、男性の場合は35分であることから、教員と事務職員との別なく男性の就業日における家事労働の負担は少ない。同じことを就業日以外で見ると、女性教員が165分に対して男性教員は64分、事務職員の場合は女性が222分で、男性が68分であることから、就業状態だけが原因ではなく、家事は女性が行うものとする性別役割分業の意識があると考えられる。育児時間については職種で分類していないが、就業日における未就学児を持つ女性の場合の育児時間は1日平均で3時間26分、これに対して男性は1時間10分であった。これを就業日以外で見ると、女性は9時間2分であるのに対して男性は4時間48分である。この時間は未就学児を持つ親の場合であるが、中学生を持つ親の就業日以外の場合では、女性が1時間9分に対して、男性はわずかに8分である。

それでは男性は育児・子育てに関心がないのだろうか。「現在、育児について困っていること」についての質問では、「ある（おおいにある、ある、すこしある）」と回答した年代は女性の場合40代（約27%）、30代（約24%）であった。男性の場合は、30代（約31%）、40代（約30%）であった。ここから男女ともに育児・子育てに関心があることがわかる。困っている事の内容についての記述では、男女ともに最も多かったのが「子どもが病気の時」「子どもと過ごす時間」であった。その他では、女性の場合は「仕事と家庭の両立」「帰宅時間」など毎日の子どもとの関わりについての内容が多かったが、男性の場合は「教育方針」「子育て環境」「経済的問題」など教育課題について関心を持っている。また、育児について、「将来、育児について不安に思うこと」の質問について、「不安を抱いている」との回答が、女性で30代（約55%）、男性も30代（約59%）であった。また自由記述では、「育児と仕事の両立」（女性43人、男性3人）、「経済的問題」（女性12、男性17）の項目で不安を持つ男女が目立った。特に、多くの女性が将来的に育児をしながら仕事を継続できるかという点に不安を抱いている様子がうかがえた。

次に深刻さがうかがえるのが介護の問題である。「介護について困っていることがある」の質問に対し、「ある（おおいにある、ある、すこしある）」と回答した者は女性で60代（60%）、男性で50代（約34%）がピークであった。自由記述の回答からは、認知症、遠隔地の家族、両親の介護、親戚の介護、経済的問題、老老介護など、課題は多岐にわたっていた。

現在介護をしている教職員のうち、女性の場合40代が34%、50代が49%、男性の場合40代が23%、50代が58%であった。つまり、大学組織の中で中堅的な仕事に携わる年代の教職員が最も多く介護に取り組んでいる。実際に彼らが介護に費やす時間は1日平均1時間以内がほとんどであるが、なかには1日に5時間～6時間も介護にあたっている者もいた。

将来の介護に対する不安については、「ある（おおいにある、ある、すこしある）」と回答した年代を最も

多い順に見ると、女性で50代（約73%）、40代（約77%）、30代（約64%）である。男性の場合は、50代（約79%）、40代（約73%）30代（約63%）のように各年代において将来的な介護の課題に不安を抱いている。

ワーク・ライフ・バランスに関する質問では、「仕事の疲れが翌日以降に持ち越される」について、「よくある（169人）」「ときどきある（151人）」と回答した者は、定時後2時間以上の超過勤務をしていた。同じ質問について、定時後1時間以内の超過勤務では、「よくある（45人）」「ときどきある（108人）」と翌日以降の疲労の持ち越しが緩和されている。仕事へのやりがいについて、管理職は「そう思う（25.7%）」「どちらかというと思う（21.1%）」であるのに対して、非管理職は「そう思う（13.7%）」「どちらかと言えばそう思う（26.5%）」と回答しており、管理職の方が強くやりがいを感じている者が多い傾向がある。

育児・介護に関して必要な支援について、最も必要と回答があったのは、「育児・介護休業を取得しやすい職場環境」で女性59.6%、男性49.8%であった。次に、「育児・介護休業に対する環境の理解」で女性52.0%、男性43.1%。続いて、「育児・介護中の業務負担についての職場の配慮」で女性44.1%、男性40.1%であった。このような調査結果は、制度の整備だけではなく、むしろ周囲に育児・介護をする人を支える意識やそれによる全体的な雰囲気醸成が重要であり、そして教員はそれが改善すべき課題であると認識していることを示している。

4. 学生の男女共同参画に対する意識

(1) 共通教育科目「男女共同参画社会を考える」について

高知大学では2012年度から共通教育科目で「男女共同参画社会を考える」（2単位）を集中講義として開講している。この講義では主題を、①性別をはじめ、あらゆる多様性への理解を深め、視野を広げる ②共生社会に向けて、課題を見出し解決について考える、の2点と決めて、学内外の複数の講師がリレー形式で講義を担当している。表2. の授業内容を見ると、労

働、社会問題、持続可能な生活、大学での学び、地域社会・行政、ドメスティック・バイオレンス（DV）、性の不一致、憲法、福祉・介護、国際社会、ジェンダー、育児、心理・恋愛、家族など学生の日常に深く関係のある領域について多岐にわたる授業が行われていることがわかる。このことは、逆の見方をすれば、男女共同参画はひとつの科目で扱うべき領域を超えて、様々な領域における教育の中にその視点を取り入れていくことが可能であることを示唆している。近年、大学におけるサービス・ラーニングで、学生が地域というフィールドに足を運んで実践の中で学習をする機会が増えつつあり、こうした男女共同参画の視点は多くの科目において積極的に取り入れられることが求められる。

(2) シンポジウムとの共同実施

高知大学では共通教育科目「男女共同参画社会を考える」の実施日にあわせて、男女共同参画社会に関するシンポジウムを実施している。同科目の履修学生はシンポジウムの出席が求められる。シンポジウムは、もともとは高知大学が平成24年度文部科学省「女性研究者研究活動支援事業」を採択したことから、当該事業のキックオフイベントとして企画されたものである。これを主催する男女共同参画推進室は女性研究者支援の土台となる意識啓発を重視し、男性・女性、ひとりひとりが暮らしやすい社会づくり、仕組づくりに参画していくことの必要性を考えることをテーマとした。

基調講演では、社会学者の江原由美子（首都大学東京教授）が、豊富な統計資料と自身の介護体験を交えて、雇用、働き方の変化の過渡期にある日本社会の状況と課題を説明した。事例報告ではワーク・ライフ・バランスについて谷俊子（東海大学特任助教）が自身の民間企業での経験を交えて、東海大学女性研究者支援事業の取組みを紹介した。そして、パネルディスカッションでは、江原、谷に高知大学人文学部教授の岩佐和幸が加わり、「持続可能な生活と研究環境について」をテーマに議論が行われた。パネルディスカッション

を含めて、このシンポジウムの講演のすべてにおいて学術的な専門分野を持つ研究者が、その生身の身体が拠り所とする生活世界における当事者として経験している苦労や課題を、どのような解決方法があるかという明確な答えが無い中で迷いながら等身大の意見を述べている事である。つまり、教科書のなかの話を単に伝達するのではなく、課題解決に向けて教員自身が考えている事や実体験を参加者と共有しようとしており、学生も当事者であるという呼びかけとなっている。この時点で、他人の話を、自分事の問題として引きつけることで知識にリアリティを与えているのである。

(3) シンポジウムのアンケート（選択回答）から

シンポジウムの参加者に表3の内容のアンケート調査を実施し、男性101人、女性47人の合計148人から回答があった。10代、20代が141人であり、ほとんどが学生からの回答である。

シンポジウムのテーマについての関心についての質問では、「大変興味深い」「やや興味深い」を合わせて70%以上が高い関心を示していた。男女共同参画を身近なことと思うかを問う質問では「そう思う」「ややそう思う」を合わせて85%が男女共同参画を身近なものと感じていたことがわかる。そして、男女共同参画について関心があることを複数回答する質問では、「雇用・労働」で84%、「子育て」で54%と関心が高く、「家事分担」についても37%と予想を超えて高い関心が示された。次に、「就職先を選ぶ上で重視したいこと」を複数回答する質問では、「給与などの待遇」が67%と最も高かったものの、「継続して働ける」の60%、「ワーク・ライフ・バランス」の33%、「子育て・介護に理解がある」の33%など、学生がこれから就職先を選ぶ上で、自分が働く当事者として具体的なイメージを持っていることがうかがえる。

シンポジウムの講演を聞く前と後の変化そのものはこの数字からだけでは分からないが、学生が「男女共同参画」について日常から高い関心を持っていたと考えるのは難しいとすると、シンポジウムへの参加を通じて、学生が身近なこととして高い関心を持つ、就職、

恋愛、結婚などのライフ・イベントと男女共同参画との関係性について理解されたものと考えられる。

(4) シンポジウムのアンケート（自由記述回答）から

ここでは、アンケートの自由記述から参加学生の意識の変化について見たい。アンケートの回答から属性が大学生のものを選び、記述の内容から3種類(a, b, c)に分けて「分類」の欄に記入した。分類の基準については、「a」は「課題に対して当事者としての自分」、「b」は「課題に対して当事者としての教員」、「c」は「社会に対する期待や批判、知識としての関心」とした。記述の中に複数の分類が可能な場合は、複数の記号を記入している。

134件の回答のうち「a」は37件(約28%)である。この分類では次のような回答があった。

「男女共同参画について関心をもって生活したい(3番)」、「考え方が変わった(4番)」、「子育てにしても家事にしても協力的な男の人と将来結婚したい(8番)」、「自分の将来を考える良い材料になった(9番)」、「結婚したら仕事をやめようと思っていたが、考えが変わった(19番)」、「夫婦助け合って生活できる環境を目指したいと感じた(30番)」、「「イクメン」に自分もなりたと思った(50番)」、「自分も「ワーク・ライフ・バランス」についてもっと考えていきたい(57番)」、「企業選択のひとつに考えていきたい(96番)」、「育児休暇を取ろうと思った(99番)」、「今後、男女共同参画社会がどのように進歩しているかわからないが自分も正しく理解し、関わるようにしたい(100番)」、「将来的には仕事と家事の理想的なバランスを考えながら生活していきたい(111番)」、「特に雇用と少子化、女性の社会への貢献の話は初めて考える事だったので自分でももう一度考え直してみたい(119番)」、「これから自分が就職を探す中で、重要視する項目が1つ増えた(120番)」、「子育ての育休を男性が取ることを当たり前な国であってほしいというより自分がそうします(130番)」。

これらの回答は、「～したい」「～しようと思う」「～します」という本人の意思を示していることから、参

加学生が講演会で述べられていた社会問題が自分の問題であると考えて、課題解決の主体になっていることがわかる。ポジティブな意思の表明とは逆に、「将来に不安を持った（11番）」というネガティブな感情も生まれるケースもある。いずれも、講演会に参加したことで、自身の態度や行動に強く影響を受けていることがわかる。

次に、「b」は134件の回答のうち17件で約13%であるが、学生が教員に親近感を抱いているものが多かった。「先生方の経験談が中心、根元にあったのでとても興味深かった（14番）」「谷先生のように働いてから研究職に就くように子育てを終えてから仕事をするという方向もあるなど改めて思った（15番）」「岩佐先生は家事や子育てをしてすごいと思った（21番）」「先生の日常など普段聞けない話をたくさん聞くことが出来ました（31番）」「その人が本当にそのことを考えている人だなんて感じました（34番）」「講師の方々の意見も聞けて良かった。イクメンの人の話しがとても興味深かった（43番）」「江原先生の体験談をふまえた講演が興味深かった（47番）」「各先生方がとても気楽に話していたのが印象的でした（57番）」「先生自身が体験していることを話して下ったので、興味持って話を聞くことが出来ました（76番）」「パネルディスカッションが新鮮でした（91番）」「思っていたより教員の方の時間がなくて驚いた（93番）」「1人ではなく多くの人の意見を聞くことができた。自分の考えと違うところがよく見えておもしろかったです（95番）」等、教員の体験を基にした話が学生に対してインパクトを与えていることがわかる。

まとめ

本稿では、大学において男女共同参画に取組み、教育に活かすことの意義について考察した。そして、大学における男女共同参画の取り組みは、大学がまさに男女共同参画の課題のなかに置かれていることを認識し、教員と学生が立場を超えて課題を共有し、その解決の方策に対して垂直的だけでなく、水平的なコミュニケーションの中で向き合わせるツールとなることを

確認した。このような男女共同参画の取り組みによって、そこで学ぶ学生はもとより大学を運営する教職員にとっても自らが研究・教育の題材であり、当事者であることを確認することで、大学全体の男女共同参画の在り方を捉えなおすことにつながる。男女共同参画は学びの機会であると同時に実践手法としての特徴を持っているのである。

1. 2. では、男女共同参画が日本社会の文脈においては多様な解釈がされがちである背景について考えた。西欧的な文化の影響が強い男女平等の概念は、個人を単位として多様なアクターが社会づくりに参画する、民主主義が浸透している社会においては自然な考え方であるが、非一西欧社会の日本では男女平等の前提としてひとりひとりが参画する仕組みが先立っている必要がある。

男女共同参画という言葉をめぐる、内田樹が述べるような男女による「ニッチ」の奪い合いという見方や、生活と仕事の両立、児童の貧困、介護支援の課題などを解決し、性別を超えて、様々な領域でマイノリティ（少数派）の立場に置かれている人が、固定した制度や価値観の中で活躍できるように協働しようという見方など、様々な見解がある。このことは、男女共同参画が一つの専門性や学問で語れる類のものではなく、専門性を超えて、すべての人が生活者としての活動を通じて当事者となる領域にあることを物語っている。男女共同参画は、専門的な学問に支えられながらも、実践的な手法であると言える。そのような実践思想を立場性の異なる多様なアクターが共有し協働しながら、文化のガバナンス、そして地域における知識生産と社会実践のガバナンスを実現していかなければならない（菅 2013）。参画アクターの多様性と平等性を保障することが、ひとりひとりが尊重され活かされる社会づくりにとって重要な役割を果たす。

3. では、大学における男女共同参画の意識調査から、教員は働き方、育児、介護に関して具体的な悩みを抱え、そして時に漠然とした不安を抱いていることを確認した。これは、男女共同参画は教員が当事者性を活かした授業を行える可能性を示している。かつて

は、科学的合理性という基準は専門家が生み出し、その合理性を生み出す知識は専門家だけが創出できるものであると考えられてきた（菅 2013）。その場合、一般の市民（「素人の市民」はそのような知識が欠如した者（「欠如モデル」）とされ、正確な科学知識が欠如した空き容器に「正しい科学知識を注入する」ことが科学コミュニケーションの役割（小林 2007）とされた。しかし、男女共同参画をテーマにして取り組むことで、生活者の立場を共有する教員と学生は「欠如」を満たすという垂直の関係だけでなく水平な関係も持つことができる。藤垣裕子は、公共空間においては専門家、科学者、技術者だけが意思決定の権力を持っているのではないとする。そして学知が置かれた公共空間を論じることが、知識を持っている人（専門家）と持たざる者（素人）との関係に対する権力関係に反省を与えるもので、さらにそれが「欠如モデル」の見直しにつながる。科学的合理性だけで問題が解決できない場合、専門家の知は市民（素人）に対して常に優位に立てるとは限らず、専門家も思いもよらない現場の知識、すなわち市民の側の「現場知」が意思決定の根拠に役立つこともある（藤垣 2003）。

4. では、共通教育科目「男女共同参画社会を考える」を参考に、男女共同参画というテーマが専門分野の異なる教員のオムニバス講義で成り立つこと、そして学生との水平的な関係という要素が学生にとって教員への親近感につながり、かつそのことが学習への関心に繋がっていることを確認した。シンポジウムの学生アンケートが物語っているように、教員、職員、学生の違い、そして専門領域の違いを超えたところにある、生身の人間が生活を通じて共有すべき問題は、男女共同参画と深い関係性を持っていて、さらに教員の個人の体験をもとにした生きた言葉が学生が受け取る知識にリアリティを与える役割を期待できることがわかった。さらに、地域から県庁職員、男女共同参画センター職員、労働局職員、性同一障がいの当事者など多様なアクターが講師となることで、学問的な課題と社会との関係性をさらに強く意識する機会をつくることができる。

高知大学では、翌平成 25 年度もシンポジウムとオムニバス講義を組み合わせた授業を実施した。このシンポジウムでは基調講演を高知県庁職員、招待講演として政治思想家が講義した。パネルディスカッションのパネリストには、男女共同参画の視点を取り入れられている民間企業、地域おこしの NPO、環境教育の NPO が参加した。そして、講義には憲法、刑法、哲学、経済学、教育学、地理学、国際学等の分野から高知大学教員が講義し、またデート DV 被害者の母親、ブラック企業と戦う社会保険労務士、高知労働局等から外部講師を招いた。そして平成 26 年度にはこれまでの授業に加えて男女共同参画をテーマにワールド・カフェ^{注2}を実施する計画である。男女共同参画の授業を専門分野や立場が異なる教員が担当することで、男女共同参画が誰にでも関係することであることが自然と理解でき、そしてこれをきっかけに授業の外にコミュニケーションの場を広げるきっかけとすることが出来る。この取組みはこれからも続けていく予定であり、様々な専門性を持つ教員が自らを教材とし、学生と共に学び、教員と学生が共に当事者性に立つことによって、大学や地域の課題解決に実践的に取り組むうえで、大学における男女共同参画の取組みの教育的効果について引き続き検討していきたい。

^{注2} アニータ・ブラウン（Juanita Brown）とデイビッド・アイザックス（David Isaacs）によって、1995年に開発・提唱された手法。知識や知恵は、機能的な会議室の中で生まれるのではなく、人々がオープンに会話をを行い、自由にネットワークを築くことのできる「カフェ」のような空間でこそ創発される」という考えに基づいた話し合いの手法。（ブラウン他 2007年）。

資料

表 1. 共稼ぎ夫妻、4大生活時間分類別、総平均時間の国際比較

(単位:時間.分)

		イギリス	フランス	イタリア	スペイン	ベルギー	ドイツ	フィンランド	スウェーデン	日本
妻	生理的時間	10.20	11.03	10.35	10.23	10.51	10.23	10.12	10.17	10.16
	収入労働時間	5.45	6.10	5.52	6.21	4.40	5.09	5.57	5.41	6.15
	家事労働時間	3.55	3.54	5.05	4.32	4.21	4.04	3.35	3.48	4.24
	社会的文化的活動時間等	4.00	2.51	2.28	2.42	4.07	4.25	4.16	4.11	3.07
夫	生理的時間	9.46	10.54	10.35	10.18	10.05	9.49	9.45	9.33	10.31
	収入労働時間	8.04	7.49	8.19	8.25	6.58	7.31	7.25	7.19	9.56
	家事労働時間	1.57	1.54	1.42	1.56	2.16	2.12	2.07	2.25	0.30
	社会的文化的活動時間等	4.12	3.23	3.23	3.20	4.40	4.29	4.42	4.41	3.05

出所: 男女共同参画 統計データブック 2009 日本の女性と男性 独立行政法人国立女性教育会館 ぎょうせい

表 2. 平成 24 年度 共通教育「男女共同参画社会を考える」の授業内容と担当教員

	授 業	担 当 教 員
1	男女共同参画社会とは (オリエンテーション)	高知大学教員
2	労働の視点から見た男女共同参画	高知労働局男女均等室長
3	日本社会の男女共同参画 現状と課題	首都大学東京教員
4	持続可能な研究活動 (パネルディスカッション)	高知大学教員 2 名、首都大学東京教員、東海大学教員
5	大学の男女共同参画の取組み—教養・人間関係・キャリアを組立てる—	高知大学教員
6	高知県の男女共同参画の取組み—地域社会・行政と男女共同参画—	高知県文化生活部男女共同参画課 課長
7	DV (家庭内暴力) の課題と人権	高知県女性相談支援センター所長
8	多様性の理解に向けて—性不一致ということ—	当事者 (テレビ司会者)
9	法律の視点から見た男女共同参画—憲法の中の男女共同参画—	高知大学教員
10	福祉の視点から見た男女共同参画—高齢社会・介護とジェンダー—	高知大学教員
11	地理学から見たジェンダー—国際社会について、共同参画度の比較・課題	高知大学教員
12	男女共同参画とジェンダーいろいろ	高知大学教員
13	育児の視点からみた男女共同参画	高知大学教員
14	心理・恋愛・ジェンダーの視点から男女共同参画を考える	高知大学教員
15	家族の視点からみた男女共同参画—私と家族のライフデザイン	高知大学教員
16	筆記試験	
成績評価の方法: 授業中の提出物 (感想文・課題 50%)、試験 50%		

出所: 高知大学 平成 24 年度 共通教育科目シラバスより

表3. 自分も幸せに、みんなも幸せに暮らせる社会づくりー「つくる」時代を迎えてーアンケート（選択肢回答）

		合計数	%	
基本情報	性別	男性	101	68%
		女性	47	32%
	年齢	10代	65	44%
		20代	76	51%
		30代	2	1%
		40代	0	0%
		50代	4	3%
		60代	0	0%
		70代	1	1%
		80代	0	0%
	職業	主婦	0	0%
		会社員	0	0%
		自営業	0	0%
		公務員	1	1%
		学生	141	95%
		無職	3	2%
その他		2	2%	
Q1	シンポジウムのテーマについて興味をお聞かせください	大変興味深い	31	21%
		やや興味深い	74	50%
		普通	27	18%
		どちらでもいい	5	3%
		全然興味がない	0	0%
		やや興味がない	4	3%
		わからない	2	1%
		その他	0	0%
Q2	男女共同参画を身近なことと思えますか	そう思う	66	45%
		ややそう思う	59	40%
		普通	19	13%
		どちらでもいい	5	3%
Q3	男女共同参画について関心があることを選んでください（複数回答）	雇用・労働	125	84%
		子育て	80	54%
		家事分担	55	37%
		人間関係	49	33%
		教育・研究	44	30%
		介護・医療	19	13%
		地域活動	14	9%
		その他	4	3%
		給与などの待遇	99	67%
Q4	就職先を選ぶ上で重視したいこと（複数回答）	継続して働ける	89	60%
		職場の将来性	75	51%
		ワークライフバランス	49	33%
		子育て・介護に理解がある	49	33%
		社会に貢献	42	28%
		専門性が身につく	29	20%
		その他	8	5%
Q5	感想	自由記述	137	92.60%

出典：シンポジウムのアンケートより

表 4. 自分も幸せに、みんなも幸せに暮らせる社会づくりー「つくる」時代を迎えてーアンケート
(感想自由記述)

1	色々な話を聞くことができ興味深かった。出産・育児の休暇や社会復帰が私が思っている以上に厳しいものでした。	a
2	日本社会の変化と「女性の働き方」「男女共同参画」が深く関わっているということがよくわかった。でも、結婚して子育てをして、その後仕事をすることも大変そうなのでかなり雇用側が良い条件にしなければなかなか労働者数は増えなさそうだった。	c
3	とても面白くわかりやすい講義でした。日本の過労やニート、フリーター増加などの問題に性別分割分業社会が大きく関わっているということを初めて知りました。日本の労働体制についていろいろな疑問を持っていたのですが、今の労働体制が成立することになった背景を知ることができ、疑問が解けて、とてもすっきりしました。また、他国と比較した日本の現状に関しても初めて知ることが多く、とても勉強になりました。これからもう少し男女共同参画社会について関心を持って生活していきたいと思います。パネリストの方々のお話もとても人生の勉強になりました。	a
4	自分にとってそんなに身近なことと思っていなかったけれど、今日の話聞いて、少し考えが変わりました。	a
5	とても参考になりました。東海大学の活動についても知れたのと、現在までの男女参画に対する積かさなってきた問題が分かり良かったです。先生方の未来ある社会への熱弁を受け、自身の将来や社会に対し意識も高まったと感じます。	ab
6	私はワーク・ライフ・バランスについて興味があったのでとても自分に合った話が聞けてよかった。資料を見ていると、育児、介護に関する支援制度を利用しにくい環境や、残業の問題などがあつた。仕事と生活を調和させるためには、国、企業、そして働く人々自身の取組が必要であると考えた。	c
7	女性からすると、このような女性の社会進出をテーマとした活動はあることはとても心強く、そして、強く生きることが大事だと思った。しかし、女性自身も女性だからという甘えがあることもあるんじゃないかとも思った。	c
8	社会的な制度よりも個人個人の考えが重要なように感じました。男の人も育休が取れる状態であっても、男の人が子育ては女の仕事と認めていないと思います。子育てにしても家事にしても協力的な男の人と将来結婚したいと思いました。	a
9	社会における男女差別についての話だけでなく、仕事と家事の両立やワークライフバランス、社会で生きていく上での困難などの話も聞けて良かったです。自分の生き方を考える良い材料になりました。	a
10	研究者が育児をするのは大変だと思うが、仕事と育児の両立には様々な方法があると分かった。	b
11	様々な考えがあり、自分自分その意見に賛同することも多く、新しい考えと思考が生まれました。同時に将来について不安も持ちました。	ad
12	仕事、育児、生活の計画性や兼ね合いが大切なのだと感じた。あくまで「男女共同参画」なので、男性が女性がと言うのではなく、お互いを尊重し合う社会をつくることができるとよいと考えた。このような人間関係は、今後の生活に生かしたいと思う。	a
13	男女共同参画の問題は、社会に出てから、働き出してからの問題だと思っていたが、大学の段階ですでに起こっているということを知りました。	a
14	先生方の経験談が中心、根元にあつたのでとても興味深かった。	b
15	子供を育てるにも仕事を継続して続けるのにもたくさんの努力が必要であると思った。子どものためにはお金が必要だ。3歳までの子供に一番必要なのは親であると思ふ。谷先生のように働いてから研究職に就くように子育てを終えてから仕事をするという方向もあるかと改めて思った。	b
16	男女共同参画社会のなかでも研究職の女性の話が多く、将来の仕事として研究職も視野に入れている私としては興味深かった。また、私の母は共働きのため母にあてはまる話もあり、これからおそろしく働く身として今後どうなるのかこの分野に興味を持った。	a
17	私は正直女性としての幸せにはあまり興味がないので、シンポジウムを聞いてもあまりなんとも思わなかった。女性としての幸せと仕事を両立したいと思うから大変であつて、仕事に生きるだけならワークライフバランスも何も考えなくてもいいのではないかと考えた。	a
18	「男女共同参画」について、聞いたことがあるくらいで、就職の時に気にすればいいかなと軽くにしか考えていなかったで、今回の講演では基本的なことを知れました。「パート」に隠されていた事実というか、概念を知れたことがよかった。キックオフシンポジウムの報告も具体的な活動を聞くとイメージしやすかった。ベビーシッターや、一時保育で仕事のために子どもを預けるだけでなく、お母さんとしての息抜きのために預けることができるという、違う角度からのサポートがすごく印象に残りました。	c
19	女性が働くのをやめようと、人口が減少している今、労働人口が足りなくなると知り驚きました。私は結婚したら仕事をやめようと思っていたのですが、少し考えが変わりました。育児支援の職場が今後増えることを願います。	ac
20	ワーク・ライフ・バランスという言葉聞いたことがあり少し興味を持った。今までの自分は男女共同参画について無関心すぎたと思う。	a
21	GDPを維持するために1人当たりの生産性を上げていかなければならないと知り、将来が不安になった。岩佐先生は家事や子育てをしてすごいと思った。	ab
22	諸外国と比較して、日本が劣っていると思いがちだが、日本の人口減少や世界の躍進が凄まじいため仕方のない部分があると感じました。	c
23	大変興味深かったです。	e
24	このようにパネルディスカッションを見ることは初めてだったため、とても興味深く聞くことができました。また、このような会があれば参加したいです。	d
25	とても興味深いお話でした。	e
26	男性、女性、正規雇用、非正規雇用でかなり格差があることに驚いた。シンポジウム形式は初めて経験したが、いろいろな話が聞けておもしろかった。	c
27	参加できて良かったです。何故女性教員を増やさなければならないか。その理論的説明の裏付けの根拠をたくさん知ることが出来ました。勉強になりました。	c
28	いつか結婚、子育てをするときが来ると思うので、谷先生、江原先生、岩佐先生の話聞いて将来のこと、研究職のこと現在の状況を知ったうえで考えることができました。	a
29	私はもちろん20代はばりばり働きたいですが、結婚して、子育てをして仕事と両立していきたい気持ち強いです。将来、就職するうえでとても参考になりました。	a
30	これから就職するにあたり、女性にとって働きやすい環境または結婚、出産の際、夫婦助け合って生活できる環境を目指したいと感じました。	a
31	先生の日常など普段聞けない話をたくさん聞くことが出来ました。とても貴重な時間でした。先生が言っていた言葉はノートに書き留めておきました。	b

32	江原さんの講義は現在の社会状態との結びつきが男女参画社会推進となっていることが非常にわかりやすく、重要性がより身近な問題として理解できた。そして江原さんの指摘としてある教育等について問題点を谷さんの事例に基づいた発表により実証していくことで見えてくる根本的な問題もみえてきて多面的に見ることの必要性を感じた。未婚女性も増加して、イクメンという存在を見つけるべしという話もあったが、離婚、シングルマザーとして子育てをしつつ、社会に出る人たちも同様に支援する必要の重要性も若干感じました。	c
33	日本の女性の雇用状況が他の国と比べて大変低く、それが過労死や、少子化につながっているということがわかりました。又、税金制度が不十分であると思いました。東海大学の活動から全国の大学へ広がり、そこから社会を変えていくことができたらいいと思います。	c
34	1限2限からもさらに詳しいお話が聞けて良かったです。このための仕事でなかったというよりは抜擢された感じでその人が本当にそのことを考えている人だなって感じました。	b
35	早口で分かりづらい部分もあったが、とても興味深い話ばかりだった。次回、機会があればゆっくり講義を聴きたい。	c
36	学校や企業における男女共同参画について大変興味深い話を聞くことができた。	c
37	女性が必ずしも育児や家事を行わなければいけないという訳でなく、男の人も休暇を取ったりできるのだから支え合って生きて行くべきだということがわかった。イクメンがもっと流行ればいいと思う。	c
38	働き方の基準を育児・介護負担者に合わせるワークシェアリング型は大学の研究活動にしか適さないのでしょうか。一般企業に適用すると、雇用者数を増やさなければいけないのでは？今、出来るだけ人件費を削減しようとしている中でこれをするのと給与が下がるという結果にならないでしょうか？	c
39	男女共同参画の現状と課題について聞くことができて良かったです。男女共同参画では、まだ課題があり、解決しなければならないことが沢山あるんだなと思いました。パネルディスカッションでは様々な観点からの意見を聞くことができて、すごくためになりました。	c
40	男女共同参画というワードは聞いたことがあったが、シンポジウムを聞くことで深く理解し、より深く考えることができた気がします。男女参画という新しい視点で現在の社会を見ることができてよかったです。	c
41	男女共同参画の先進的な取り組みについてまなぶことができたのでよかったです。取り組みによって子どもを産む先生が増加したなどの、成果ができてきていることを知り、すごいと思った。さまざまな取り組みは続けることが大事であることを学んだ。	c
42	たくさん興味深いお話が聞けた。これから就職、結婚、出産などを経験する際、自分が女性として出来ることをしっかりやろうと思った。	c
43	男女をとりまく問題や雇用などに関することをしっかり学べたと思う。グラフなどを見て他国との違いを視覚的に感じ取ることができたのでよかったです。講師の方々の意見も聞けて良かった。イクメンの人の話しがとても興味深かった。日本の男は仕事、女は家事という古い考えがだいぶ変わってきていることが実感できた。	b
44	日本は他国にくらべても男女共同参画がすすんでないことが分かっておどろきました。研究者に女性が入ってから新たな研究がすすんでいくのが楽しみだと思いました。家での話などとても興味深くおもしろかったです。	c
45	日本の社会における男女共同参画の現状と課題について学びました。女性の働き方の自由度の向上が日本の成長のカギになると感じました。また、そうした環境づくりも大切で、その理解を社会全体でしていかなければいけないと思います。	c
46	日本は、貧しい人からお金を吸い上げ、豊かな人に再分配しているという話がとても印象に残りました。また、これからは子育てしやすい社会を創ることが重要だと思った。	c
47	江原先生の体験談をふまえた講演が興味深かった。ワークライフバランスについて考えるきっかけになった。	b
48	自分にも関係のある話とかで、興味深い内容だった。	a
49	江原先生の最後の育児や介護を職場で邪険に扱う雰囲気を変えていかなければならないという言葉が本当に心に残りました。	b
50	男女共同参画社会のために様々な法律があるんだと思いました。「イクメン」に自分もなりたと思いました。	a
51	男女共同参画社会における現状と課題について理解することができました。ワーク・ライフ・バランスについて理解することができました。産学協働女性キャリア支援について理解することができました。	c
52	近年では、女性で大学に通う人が増えてきた。しかし、世界的にみたら日本の女性は、まだ、男性とくらべて、少なく感じる。	c
53	男女共同参画は女性の不利をなくすためのものだと思っていたが、男性の育児休暇制度など、男性に対しても考えられているもので、興味がわいた。	c
54	今回のシンポジウムを聞いて、本来の男女共同参画社会を実現するには、制度を作るだけでなく、周りの理解を深めるのが大切で、そして難しいんだなと思いました。今後は、その理解を求めるためにはどうしたらいいのか考えていきたいです。	a
55	男女別労働人口等の推移を見て女性の労働力の向上がどれ程大切かわかった。今後、労働できる人口が減っていく上で、女性の社会進出は、非常に重要になっていく。女性が働きやすい、男性との差がない仕組みが出来れば良いと思った。	c
56	スライドで問題点や取組みを詳しく解説して頂いたので、男女共同参画についてより理解を深めることができました。	c
57	各先生方がとても気楽に話していたのが印象的でした。又、各先生や江原先生等高知大学以外の大学の先生の話が聞けて良い経験が出た気がします。自分も「ワークライフバランス」についてもっと考えていきたいなと思いました。	ab
58	現代の日本社会における具体的事案から、タイムリーな話題まで知ることができて、勉強になった。	c
59	本日のお話を聴いて、男女共同参画社会というものがより身近なものであると感じた。	a
60	興味深い内容が多く、考えさせられることもまた、多かった。頭を使う講義だった。	c
61	特に、江原さんの話は非常に鋭く全体を捉えていて、興味深かった。その話が聴けただけでもこの授業をとった甲斐があった。	c
62	経済および、技術進歩との関連性がよかった	c
63	男女共同参画社会を考える上で、経済の話が聞けるとは思わなかった。とても興味深く楽しかった。	c
64	今は変革期にある日本をどう立ち直すか、男女共同参画で、日本は立ち直るのか、様々な現状や意見が聞けて良かった。	c
65	日本社会における男女共同参画への現状と課題について知ることができた。また、男女共同参画に重要な生活(持続可能)についても知れた。	c
66	たくさんの人から意見が聞けて面白かった。日本の経済率が人口が減っているにも関わらず保っているのは女性の方の社会進出と聞きこの問題は大切なものだと思った。	c

67	今回いろいろな話を聞くことが出来て参考になりました。ありがとうございました。	e
68	世界の経済成長の速さを実感させられ、焦りを感じた。人口が減少がこんなに深刻な問題とは思ってなかった。岩佐先生の話がおもしろかった。	a
69	専門の人が自分の実体験をもとに説明して下さったので大変理解しやすく、勉強になりました。	c
70	普段はあまり聞かないような話で、話すような機会もない方々と話すことができ、貴重な経験だった。	c
71	「子育て」しにくい社会が経済成長しにくい社会を生み出したかもしれないというテーマの話にすごく納得した。まだまだ男性の育児休暇がとれない社会なので、育児休暇を取りやすい社会をつくってあげれば、また、経済も成長するのではないかと感じた。	c
72	先生たちの個人見解や私生活を交えて話してくれたので、それが具体例となって男女の育児の在り方や労働環境の在り方の話が聞きやすかったです。これからの将来の参考にしたいと思っています。	a
73	今の当たり前前とと思っている現状を保つために様々なことが行われているということを知った。現実と向き合いつつ、さらなる進歩をばくたちはしていかなければならないと思った。	c
74	社会の変化と男女共同参画と密接に関わりが分かり勉強になった。これからは社会は変革期にあたるので必死に社会をついていこうと思う。これから男の僕も育児休暇をもらってみたいと思う。	a
75	身近に関わることのない話だったけれど、将来必ず必要なことなので勉強になりました。	a
76	先生自身が体験していることを話して下さったので、興味持って話を聞くことが出来ました。	b
77	男女共同参画社会の“社会”は仕事に関することだけなのか疑問に思う。日常生活から町を含む社会ではないのかなと考えたい。それと研究者（生物学）を目指している私か言わせてもらうと昆虫など生物嫌いが女性に多くてそれで研究者に女性が少ないというのは違うと思う。女性の研究者がだめとは全く思わない。	c
78	ワークライフバランスについての先生のお話を聞いて、とっつも理解が深まりました。	c
79	今後、社会の発展において女性の力が大きく必要であることがよくわかった。現在の状況では、男女共同参画の推進はなかなか進んでおらず、考えていかなければならないと思った。	c
80	自分の知らなかった社会の現状と仕組みを知ることが出来ました。	c
81	貧しい人から金をとって、豊かな人へ金を渡す制度がいまだにあることや、専業主婦を守る意見によって、その制度に反対することができないことに驚いた。	a
82	ワークライフバランスのことだけでなく、先生方のいままでの経験も聞くことができ、自分の将来、就職についても考えさせられた。	a
83	男女共同参画は日本経済を再生させるうえで、非常に重要なものであるということが分かった。男女共同参画社会を形成するためには、我々のような学生が今回のようなシンポジウムに参加して現状や課題を学ぶことが必要であると感じた。そういった面で、今回のシンポジウムに参加することができてよかったと思う。	a
84	日本は他の先進国に比べ男女共同参画がほとんど進行してないとは思わなかった。	c
85	企業、大学の教職員も含めて多様な生活スタイルに合わせた職場環境を整備していくことが重要だと思った。また、育児や看護も個人に負担がかかるのではなく、全体としてカバーしていける社会づくりが大切だと思った。	c
86	現代社会において、男女共同参画がいかに後退しているのが理解でき、今後大学等で取り組んでいくことで対応できると言われ関心を受けたとともに、企業選択のひとつに考えていきたいと思いました。	a
87	生きている人々の人的な多様性を誤認することが“男女平等”を導くと思った。大変ためになる講義だった。	c
88	貴重な話を聞けたり、今まで興味がそんなになかったがとても関心がわいた。卒論のテーマの一つとして考えてもいいように思えた。	a
89	女性の雇用問題よりも育児の共同性を今日は多く学びました。まだまだ先の話ですが、とてもためになりました。ありがとうございました。	c
90	いろいろな先生方の話が聞けて良かったです。	b
91	分からないことがわかって、勉強になりました。パネルディスカッションが新鮮でした。	b
92	男女共同参画社会は知らないことが結構ありました。	c
93	思っていたより教員の方の時間がなくて驚いた。比較的時間なイメージが。	b
94	グローバル化による雇用崩壊と家族に関して、男性の経済力不安、女性の子育て不安などがとてもシビアになっているということが分かった。さらにワークライフバランスのことがよく理解できた。	c
95	1人ではなく多くの人の意見を聞くことができた。自分の考えと違うところがよく見えておもしろかったです。	b
96	生活、学習、就職、仕事においてもやはり男女が協力していかないと社会の発展は見込めないと思うので、その課題を解決できるようにしていかなければならない。	c
97	社会貢献、地域活動などには必要があると思っています。	c
98	ワークライフバランスが重視されていない世の中なのでやはりこのことは見直されるべきだと思った。	c
99	育児休暇を取ろうと思いました。家事は大好きです!! 弁当男子で～す。	a
100	韓国の出生率が急落していることに驚いた。また、日本や韓国に限らず東アジアで出生率がなぜ低いのかということに興味を持った。今後、男女共同参画社会がどのように進歩しているかわからないが自分も正しく理解し、関わるようにしたい。	a
101	このような機会を設けてじっくり聞き入れることができるのは非常に貴重だったし、男女共同参画社会を唱える中で実際にどのような活動を行っていることが詳しくわかったのでとても有意義だった。	c
102	男女共同参画社会をつくるためには、女性だけではなく男性からの行動も大切なのだと思います。	c
103	人口が減少する今、労働力として女性が仕事に就くことはとても大事だと思いました。講義を聞いたうえで、男性中心の今の社会に女性が同様に参画していくことは困難だと思ったが、ペースは遅いながらも進んでいると知って、良い傾向だなと思いました。	c
104	今まで好影響の多かった社会のグローバル化が地域経済の崩壊以外にも女性の雇用についても悪影響を与えているとは知らなかった。それでも育児休暇等は会社自体には大きな穴を空けてしまうので、やはりまだ男女共同参画社会が作れないのは仕方ないものだと思う。	c

105	年齢差別など気が付かないところで、日本独自の差別があった。固定観念にしばられていることに気が付いた。男女共同参画社会は法で規制するものなのか？人の意識は法で変わるのか？自分には正解がわからない。	c
106	江原さんの話は内容が理解しやすくよかったです。状況が把握できました。谷さんの話では男女共同参画における具体的実施例が聞けて良かったです。パネルディスカッションは新しい形式で、いろいろな情報が聞けて良かったです。	c
107	将来に向けての経済的影響について知らないことがあり、不安になる点があった。育児についてはまだ実感がわかなかった。	a
108	学術分野ではまだまだ女性の割合が少ないということは知らなかった。男女共同参画といってもまだまだなんだなと思った。もっといろんなサービスや体制を整えて女性がより社会に出れるようにまた、活躍できるようになって日本の産業や技術、研究など、様々な分野での発展がさらなるものになればいいと思う。	c
109	日本のGDPが少子高齢化に伴い減少していき経済が右肩下がりなのは知っていた。自分ができるとなると小さすぎて何の影響も与えられないのが残念です。	a
110	日本と海外の違い（男女共同を通して）がよくわかり理解の参考になった。また、今日本国内で行われているイベントも知ることができ、今後に生かしやすいシンポジウムであったと思う。	a
111	普段聞けない貴重な話を聴くことができ、とても良かった。将来的には仕事と家事の理想的なバランスを考えながら生活していきたい。	a
112	3人の方の色々な面での話を聴けて、考えや視野が深まりました。	c
113	女性の社会進出のための活動は知らないだけでけっこういろいろ動いているのだと知った。成果が出るまで活動を続けて行ってほしい。育児についてもいろいろ考えられることがあってよかった。	c
114	色々なグラフを用いて説明してくれて分かりやすかったです。しかし資料では分からない勤務実態なども含めて考えるべきだと思います。パネリストの話もそれぞれ違う意見を持っていましたので楽しかったです。	c
115	今の社会では男女平等を協力しながら生活を支えることが必要不可欠であるが、その反面自分たちの生活があまり重要視するあまり少子化がより早く進んでいっている。私は男女の参画社会を否定したいわけではないが、今の日本の社会で時間がたちついたところには崩れ落ちることになる。どのようにこれから日本を活性化させるかとてもキーポイントになると思う。しかし私の思うことは今の参画社会の考えでは日本は終わると思います。	c
116	院に進学するのは女性の方が多いと聞き少し驚きました。今の世の中では、自分の興味や関心のあるものについて、積極的に学べばより深く、学習、探究できると思います。そういった人たちが、性別という区分で差別されることはあってはならないし、私も姉、私、妹と3姉弟ですが、姉も妹も将来の夢に向けて必死に頑張っています。そういったことも含め、私たち1人1人の意識が少しずつでも変わっていけばいいと思います。	c
117	1人1人の話しが面白く、2時間楽しめた。	c
118	良かった。	c
119	とても興味深かった。特に雇用と少子化、女性の社会への貢献の話は初めて考える事だったので自分でももう一度考え直してみたい。	a
120	ワークライフバランスという言葉があまり身近ではなかったので、今日学習することができて、これから自分が就職を探中で、重要視する項目が1つ増えたと思う。また、江原先生の人生についての話しが個人的にはすごく心に染みた。	a
121	日本と世界の国々を比較しながら話を展開していく形でのシンポジウムであったので聞いている側も理解しやすく、日本が世界の国々と比べてどうか”といったことの現状をつかみやすかったです。また時代の変化に伴ってどう日本社会が変化していったについても時代的背景の説明やグラフでの説明を通じて分かりやすく説明がなされていました。とても勉強になりました。	c
122	何故大学で女性の就学率を上げなくてはいけないのかわからない。大学に進学する人は自らの意志でしているはず、少し偏見が入っているのではと思う場面が多々あった。	c
123	実際に現職の教授とパネルディスカッションができて、ワークバランスについてより現実的に考えることができました。女性についてだけでなく、男性の育児や家事についても触れていたのが興味深かったです。	c
124	男女共同参画社会はまだまだ実現していないがそれが実現するように様々なことが行われていることが分かった。あと少し休憩時間が欲しかった。2時間を連続は辛い。	c
125	人口が減少してきている中で、今よりも女性が社会で活躍できるようなデザインの重要性がわかった。	c
126	男女共同参画社会は身近というよりは若い人の間では当然のようになっていると思う。	a
127	男性は女性のみによって起っている社会的問題を知らずに過ごしており、国などで法を作ろうにも議員が男性の方がはるかに多いため女性が社会で働きやすくなるような法や制度があまりできないように感じる。	c
128	男女共同参画社会はについて様々なことを学びました。研究職の話はとても魅力的でした。ありがとうございました。	c
129	江原さんのお話では日本がいかにか女性の雇用や、パートタイムなどの面から見て、世界から遅れているかということを知り知らされた。また、谷さんのお話では現在行われている取り組みについて知ることができた。	c
130	イクメンの見つけ方、育て方という話を聞いてしまうと、現代の男性はよほど女性から頼りにされていないんだなと感じました。家庭と仕事の2つの世界にいればどっちかがダメになっても、もう一方で生きられるということに気づかされました。私自身、大学、研究職を目指しています。確かに大学教授は変な人が多いと思う。子育ての育休を男性が取ることを当たり前前な国であってほしいというより自分がそうします。	a
131	私自身、女性の立場が低いことに問題があると思う。しかし、もし女性が働きに出ってしまった場合、育児などはどうなるのだろうか。夫がやればいいのか、育児に関しては、授乳等の面で妻より劣ると思われる。男女差別をなくすためにはこういった育児面での支援が重要だと思いました。女性が社会に出てしまえば子供の面倒は誰が見るのか、女性だけでなく、残された子供の気持ちも考えてほしい。	c
132	とてもわかりやすい講義でした。楽しく話を聞けました。今、どんどん男女共同参画社会はよりよくなってきているのでこのままよくなればよいと考えています。	c
133	社会特に労働の事を考えると男女により、違いがあるのは今日の話聞いて改めて確認できたと思う。やはり「出産、子育て」に関してより優しい社会があればいいなと思った。	c
134	今回のシンポジウムでは教授たちの経験を多く聞くことができ、これから自分たちは一番働ける年齢になるので、自分たちの将来のためにどうしていくべきなのか考えさせられました。	b

a = 講演を聞いて当事者意識に目覚めた。自分で主体的に行動しようと思った。

b = 教師が課題の当事者として語ったことに知識に対するリアリティを想起している。

c = 課題を知識として捉え、一人称ではないが、社会にとって必要と認識している。取りあえず関心を持った。

出所：平成24年度しあわせぶんたんシンポジウムアンケート回答から

[参考文献]

- 1) 阿部謹也、2001年、『学問と「世間」』岩波書店
- 2) アニータ・ブラウン、デイビッド アイザックス 著、香取 一昭、川口 大輔、2007年、『ワールド・カフェ～カフェの会話が未来を創る』ヒューマンバリュー
- 3) 宇井純、1991年、『公害自主講座 15年』亜紀書房
- 4) 内田樹、2008年、『女は何を欲望するか?』角川書店
- 5) 宇佐見義尚、2012年、「キャリア教育で変わる学生と教員 学生中心の教育実践と理念」、清水亮・橋本勝編著『学生・職員と創る大学教育 大学を変えるFDとSDの新発想』ナカニシヤ出版
- 6) 小此木啓吾・濱田庸子・山田康、2004年、『<次世代を育む心>の危機—ジェネラティビティ・クライシスをめぐって』慶応大学出版会
- 7) 木野茂、2012年、「学生とともに作る授業、学生とともに進めるFD」清水亮・橋本勝編著『学生・職員と創る大学教育 大学を変えるFDとSDの新発想』ナカニシヤ出版
- 8) 京都大学女性研究者支援センター編、2008年、『京都大学男女共同参画への挑戦』明石書店
- 9) 菅豊、2013年、『「新しい野の学問」の時代へ知識生産と社会実践をつなぐために』岩波書店
- 10) 高知大学男女共同参画推進室、「シンポジウム講演記録 江原由美子氏 基調講演」、『国立大学法人高知大学男女共同参画推進室 男女共同参画支援ステーション 平成24年度報告書』、高知大学男女共同参画推進室、2013年
- 11) 国立大学協会、「国立大学における男女共同参画推進について—アクション・プラン—」
- 12) 国立大学協会、2013年、『国立大学における男女共同参画の推進の実施に関する第10回追跡調査報告書』国立大学協会
- 13) 小林傳司、2007年、『トランス・サイエンスの時代—科学技術と社会をつなぐ』NTT出版
- 14) 長谷川伸、2012、『「授業運営委員会」のススメ 学生たちと授業づくりを楽しむ居場所づくり』、清水亮・橋本勝編著『学生・職員と創る大学教育 大学を変えるFDとSDの新発想』ナカニシヤ出版
- 15) 平川秀幸、2010年、『科学は誰のものか—社会の側から問い直す』NHK出版
- 16) 廣瀬淳一、小島優子編著、2014年、『平成25年度 高知大学における男女共同参画に関する意識調査報告書』、高知大学男女共同参画推進室
- 17) 藤垣裕子、2003年、『専門知と公共性—科学技術社会の構築へ向けて』東京大学出版
- 18) 村上陽一郎、2010年、『人間にとって科学とは何か』新潮社
- 19) Dohrenwend, B. S. and Dohrenwend, B. P. :A brief historical introduction to research on stressful life events. In “Stressful life events” Editors: B. S. Dohrenwend and B. P. Dohrenwend), p1-5, John Wiley & Sons, New York (1974)
- 20) Holmes, T. H. and Masuda, M. :Life change and illness susceptibility. In “Stressful life events” Editors: B. S. Dohrenwend and B. P. Dohrenwend), p1-5, John Wiley & Sons, New York (1974)
- 21) McKeering, H. & Pakenham, K. L, 2000, Gender and generativity issues in parenting : Do fathers benefit more than mothers from involvement in child care activities? Sex Roles, 43, 459-480.